

磁器製狛犬修復事業報告書

～陶山神社 磁器製狛犬と台座の修復/復原～

2024

地域歴史資源デザイン研究会



修復/復原された阿形狛犬と台座

撮影：2024年4月25日

～修復・復原事業の経過～

「陶山神社の磁器製狛犬 令和の修復・復原事業における台座の制作について」

色鍋島今右衛門技術保存会
会長 十四代今泉今右衛門

今回の修復事業の話の発端は、赤絵町の新羅山のお祓いのときに、陶山神社の宮司さんから、「鳥居の修復が終わりましたが、狛犬も傷んでいますので修復されませんか」と言われた言葉である。そのような大きな事業をとって聞いていたが、その後自分が還暦を迎えるにあたり、これまで自分自身、有田の職人の仕事の積み重ねのお蔭で制作できていることから、何か恩返しができないかと思いこの修復事業をお受けした次第である。

その後、話が進むにあたり、ヒビや汚れや強度的な修復は京都の株式会社スタジオ三十三様で大丈夫であるが、本殿向かって右側の狛犬の台座の部分が三分の一ほど欠損しているので、そこの部分は再度制作してほしいということになった。これは、現在残っている現存部分を調査しつつ、欠損部分を想像しながら制作するという作業で、長年の風雨にさらされて風化したものを見ながら、元の形状、釉薬や上絵の色調・原料・文様を想定し、段取りを進めた。

そこでまず、欠損部分の生地制作に入った。明治期に制作したもの自体が平面でなく変形していて、変形を復原することは不可能に近く、現在制作できる最大限の技術により、陶板を小分けしながら形状制作を進めていった。

同時に文様部分の復原も進めていったが、現存部分も風化した箇所もあれば土に隠れていて風化が進んでいない箇所もあり、窯業技術センター様や辻絵具様の協力を得ながら、様々な視点からの調査を進めていった。調査を進めていくと、原料としてはヒ素を含むものもあるなど、現在の原料で制作できないものもあり議論を重ねた。そこで判断を迷ったのが、風化した擦れた風合いを求めて復原するか、制作した明治期の当初の雰囲気想定して追求するかの問題であった。これは今後、明治期のものと今回制作するものが、何十年後に同化することを目指すべきではないかと考え、できるだけ明治期の雰囲気を求めて制作すべきと方針を決めた。

制作は、釉調も確認しながら、まず小分けにした生地を完成させ、同時に進めていた絵具や文様の筆致の研究など議論を重ねながら絵付けに取り組んでいった。実際に絵付けする段階になっても、線の幅や文様の細部にいたるところも試験を繰り返し、細かな神経を遣い絵付けを完成させた。

この狛犬は明治20年(1887)、赤絵町がおくんちの当番区の年に奉納されたものと聞いている。さらに翌年には稗古場区から磁器製の鳥居が奉納され、さらにその次の年は中原区から水甕が奉納されている。

今回この制作を通し、明治期の先人の競い合いながら制作していくという有田の職人としての気概にふれることができたのは大切なことであったと思える。このような思いの連なりこそが有田の伝統であると思い、そこに携われたことを大変嬉しく思う。

〔文化財 修復・復原〕 彩料技術研究所

辻 絵具店

代表 辻 昇楽

今まで携わった主な修復復原には奈良の唐招提寺金堂壁画、文化財となっている琉球王朝時代の枝梅竹文碗、世界遺産になった沖ノ島の奉獻品等があり、文化財で有るか無いかに関わらず求められる色出しに携わってきた。

今回依頼を受けた色は「黒黄び」という色で、ざっと言えばレモンイエローの合成顔料に赤みを帯びた山吹色加わり、さらに黒味が加わるという現代ではあまり用いられていない色相であった。

明治には海外から新しい洋絵の具や合成顔料が国内の窯業産地に持ち込まれ、今までなかった色相や雰囲気を持った絵付けが流行となり、「黒黄び」という色も多少異なった色相が多くあるものの、この色もその中の一色だったと思われる。

焼成温度について、私が店を継いだ 38 年前に同じ赤絵町で伝統工芸士であられ、絵付業を営まれていた西原功氏に尋ねたことがある。すると、720 度という返答が返ってきた。数年前に九谷の伝統工芸士であられる福島武山氏に昔は何度で焼成しておられたか伺ったところ、730 度という返答だった。

その辺りの温度設定を踏まえて当初は色出しの焼成テストを行なっていたのだが、こちらのテストと今右衛門窯での焼成テストでは全く色味が異なって上がってくるのである。どうやら焼成温度が 800 度を超えているらしいということが判り、この温度帯で色を出して欲しいというリクエストを受けた。

そこからはテストを繰り返して見本に近づけていくことが出来たというわけであるが、実物は明暗差が出るような、言い方は悪いが乱暴な絵付けにより明暗効果が出ているのだが、今回の絵付けでは全般に丁寧で綺麗な絵付けになっているのも見どころかと思う。

今回の修復・復原事業による色出しは、何よりも有田の先人たちの心意気、知恵、技術と向き合うことができ、私にとっても有益な時間であった。

この事業に携われたことに感謝し、完成した狛犬を今後も見守っていきたいと思う。



十代今右衛門と十四代今右衛門の一体化



「黒黄び」137 年目の色合わせ

拡大→

「陶山神社磁器製狛犬修復」

京都市伏見区竹田松林町 11 番地
株式会社 スタジオ三十三
代表取締役 撫養 健至

陶山神社の磁器製狛犬一對（阿吽形）は、境内の拝殿と鳥居との間に置かれている。明治 20 年(1887) に十代今泉今右衛門が制作し、神事町であった赤絵町から奉納されたものである。神社には、その他に磁器製鳥居、磁器製大水甕、磁器製玉垣、青銅製狛犬、青銅製灯籠などが置かれており、その様子は信仰の対象であると同時に「野外美術館」的な要素が感じられる空間となっている。

この磁器製狛犬一對（阿吽形）について、令和 4 年(2022)に十四代今泉今右衛門様及び地域歴史資源デザイン研究会 八尋聖剛様より修理についての相談があった。

対象の狛犬は経年による汚損や破損が見られた。特に亀裂箇所からの傷みが進行したことによる破損と、阿形狛犬の台座については欠損部分が多く見られた。欠損部分はモルタルで埋め、その表面には化粧タイルが貼られ、簡易に修理が施されていた。今回、改めて修理を検討するにあたり、文化財の修理の方法について述べたい。

文化財の修理には復原修理と現状維持修理があり、そのいずれによるかは状況に合わせて決定する。復原修理とは各欠損部分を可能な限り制作当初の姿に補作復原したり、色を再現したり塗り替えたりすることである。現状維持修理は現状を尊重しそのまま保存するため必要最小限の（必要十分な）修理しか行わない方法である。近年は積極的な復原修理はあまり行われず、損壊が広がりそうな箇所に対しこれを食い止めるための処置や、明らかに資料本来の形状が認識できない箇所のみを現状維持修理する傾向がみられる。これらを踏まえ、令和 5 年(2023) 4 月 30 日に弊社から修理方法のための企画書を提出した。

この提案は、狛犬本体及び吽形の台座については、令和 2 年(2020)に修理を行った磁器製鳥居と同様の信仰の対象としての「必要な修理」「記録の保存」「見た目への追及」を方針とした文化財的修理を行うことである。ただし、阿形の台座については、欠損部分の割合が多いため現状維持修理方法では狛犬との一体的な調和が取れないため、復原修理を提案した。

その結果、欠損部分については十四代今泉今右衛門様に復原をして頂き、その復原された資料を残存する実物資料に組み込むこととなった。

作業は、まず狛犬の洗浄から始まり、欠損部分への樹脂充填及び彩色作業、そして吽形の台座の解体から洗浄、再接合、欠損部分への樹脂充填及び彩色作業を行った。最後に阿形の台座を解体して洗浄後、実部資料と復原資料の接合を行った。この接合作業では文様の整合を損なうことなく形状を整えるため復原資料の一部を削り接合面の調整を行った。

今回の修理は、信仰の対象、文化財、美術品としての見栄えや価値が損なわれることのない唯一の修理方法として、十代今泉今右衛門作に十四代今泉今右衛門の作品を融合させることで補えた復原修理である。

修復報告書

磁器製狛犬修復報告書目次

ファイル名称	ファイル No.	内 容
狛犬修復報告書 00	231018-001	◇表紙、はじめに、修復・復原事業の経過 (1～ 5 頁) ◇目次 (6 頁)
狛犬修復報告書 01	240225-002	◇陶山神社由緒、磁器製狛犬について (7～ 8 頁)
狛犬修復報告書 02	240611-003	◇報告書 1 修復前「磁器製狛犬本体」の現況 (9～12 頁)
狛犬修復報告書 03	240611-004	◇報告書 2 修復前「磁器製狛犬台座」の現況 (13～16 頁)
狛犬修復報告書 04	240630-005	◇報告書 3 狛犬台座解体作業 (17～20 頁)
狛犬修復報告書 05	240715-006	◇報告書 4 狛犬台座解体部材の参考写真 (21～22 頁)
狛犬修復報告書 06	240616-007	阿・忬形狛犬「台座内部」の復原と補強 (23 頁) ◇報告書 5 阿形狛犬台座「陶板」を復原する (24～26 頁)
狛犬修復報告書 07	240623-008	◇報告書 6 阿形台座復原陶板絵付け用に 「新たな上絵具」開発 (27～30 頁)
狛犬修復報告書 08	240812-009	◇報告書 7 阿・忬形狛犬“台座据付け” (31～34 頁)
狛犬修復報告書 09	240911-012	◇報告書 8 阿・忬形「狛犬本体」の修復と復原箇所 (35～38 頁)
狛犬修復報告書 10	240814-010	◇報告書 9 阿・忬形狛犬“本体据付け” (39～40 頁)
狛犬修復報告書 11	240825-011	◇報告書 10 陶山神社磁器製狛犬と台座修復記念式典 修復記念陶板設置、参考資料(1)・(2) 編集後記、謝辞、裏表紙 (41～46 頁)

●【陶山神社】

◇創 建 万治元年(1658)

◇祭 神 応神天皇（品陀和氣命 ホムタワケノミコト）

◇由 緒 『皿山代官旧記覚書』（鍋島報効会・徴古館蔵）宝暦八年(1758)寅八月の条に、「有田皿山宗廟八幡宮勧請已來、當年百ヶ年ニ相當候条、寺坊へも其經營有之事ニ御座候」とあり、創建は万治元年(1658)とされる。

また勧請した八幡宮は、松浦郡有田郷中宗廟大里村に鎮座する蓮華石正八幡宮である。八幡宮の由緒（鍋島報効会・徴古館蔵）『松浦郡有田郷 蓮華石八幡宮由緒 / 諸由緒縁起 / 武重日向』の「覚」のなかで、「……古來有田皿山迄之宗廟ニ御座候處陶器製累年致繁昌人家多相成候ニ付 延寶天和(1673～1683)之頃大樽山江社殿相建當社を致勧請 皿山中之宗廟与今以奉尊信候……」とあり、『皿山代官旧記覚書』と15～25年のずれがあるものの由緒はほぼ正確とされている。尚、由緒は日向の父重清因幡正は「天保九年(1838)六月二日死す」と記され終わっている。

●【磁器製狛犬】

◇奉 献 神社奉獻品臺帳に「明治廿年(1887)丁亥十月吉日/神獸一對/高さ七尺」と記載ある。

◇奉獻者 赤繪町區

◇細工人 十代今泉今右衛門（今泉藤太）と伝わる。絵付けは十代今泉藤太である。

◇修復前の磁器製狛犬



撮影：平成26年(2014)05月09日

今回の修復に際し、左右の狛犬・台座に細工人の名前を期待したが記載はなかった。拝殿向かって左側の呷形台座は四辺とも残存し、後面右端に「赤繪町區」の記載がある。右側の阿形台座は後面左端に「赤繪町區」の記載があるが、既に失われている二辺に細工人の名前が記載されていたかは定かでない。

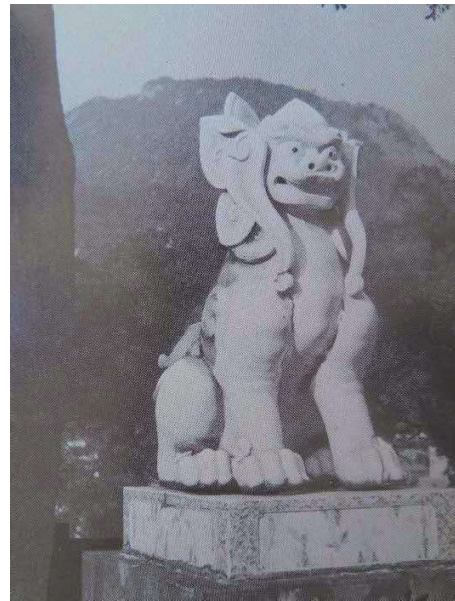
平成19年(2007)3月有田町教育委員会発行の『有田皿山遠景』には、“有田の語り部”といわれた池田忠一氏の懐旧談を『肥前陶磁史考』を背景に置いて、元有田町歴史民俗資料館長の森田一雄氏が構成執筆されたものだが、この中で白磁の狛犬について「赤繪町で伝統の色鍋島を引き継ぐ今泉今右衛門家の十代今泉藤太の作になる。今泉家にはつい最近までその型が保存されていた（参考資料2）そうだ。」と記されているがその根拠は詳らかではない。

＊池田忠一氏は、泉山で赤絵屋の長男として生まれ、有田町役場や陶磁器会社の勤務経験があり、その後、町議、有田町文化財保護審議会委員、有田古窯跡群と町並み保存調査委員などの公職を歴任されている。

昭和 48 年(1973)10 月初版発行の永竹威著の『日本の陶磁 1 伊万里』には呷形狛犬の写真が掲載され、「10 代今泉今右衛門絵付 有田赤絵町寄進」と記されている。

又、平成元年(1989)9 月有田町教育委員会発行の『皿山なぜなぜ』の「この大鳥居も焼き物？」の項を担当執筆された松本源次氏が狛犬について、「…赤絵町が今右衛門窯で焼いた磁器の狛犬一対を……」と記されている。

このように、狛犬本体や台座には製作者や絵付け者の名前は残されていないが、有田町民の間では狛犬の製作者は十代今泉今右衛門と語り継がれている。



陶山神社の磁器製狛犬(呷形)

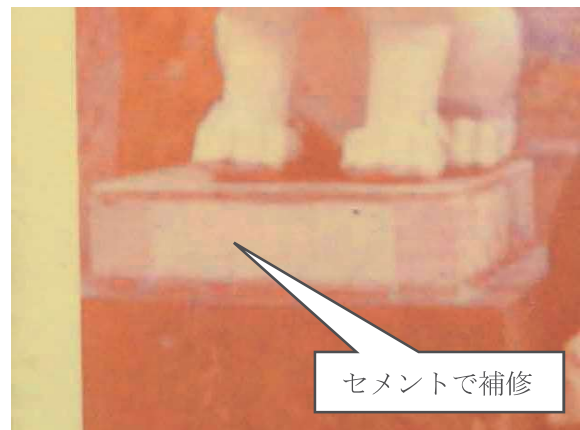
『日本の陶磁 1 伊万里』より転載

陶山神社の磁器製狛犬について、これまでに発行されている書籍や雑誌に掲載されている写真は何故か呷形ばかりである。今回の修復事業にあたり狛犬関連調査過程において、十四代今泉今右衛門様より阿形狛犬前での記念写真をご提供いただいた。

写真は昭和 37 年(1962)夏と昭和 40 年代前半の 2 枚あり、既に台座の前面と左右側面が現在と同じようにセメントで補修されていることが判明した。同様に阿形狛犬の左側角髪先端の破損も確認された。このことから昭和 37 年(1962)夏には阿形狛犬の破損は確認でき、書籍に掲載される写真は破損していない呷形狛犬を意識的に選んだものと推測される。



昭和 37 年(1962)夏撮影



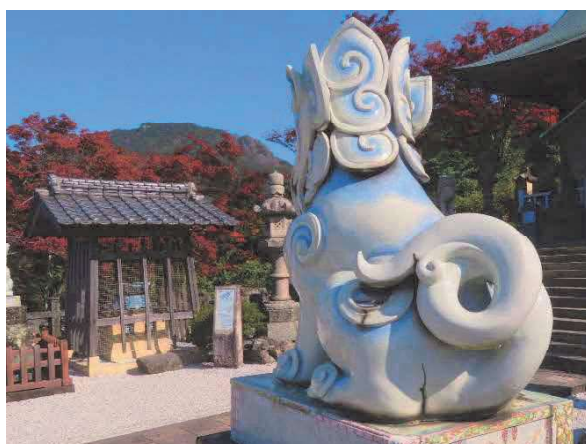
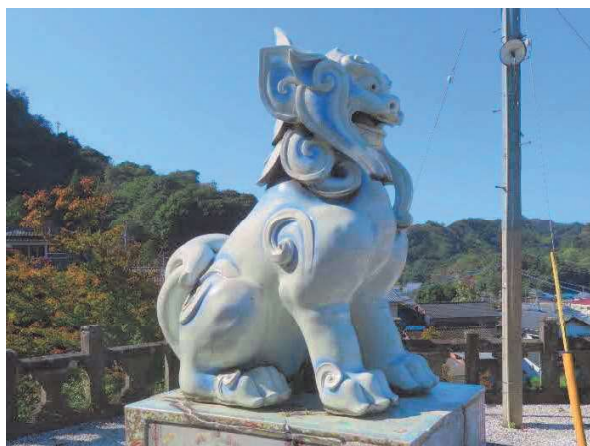
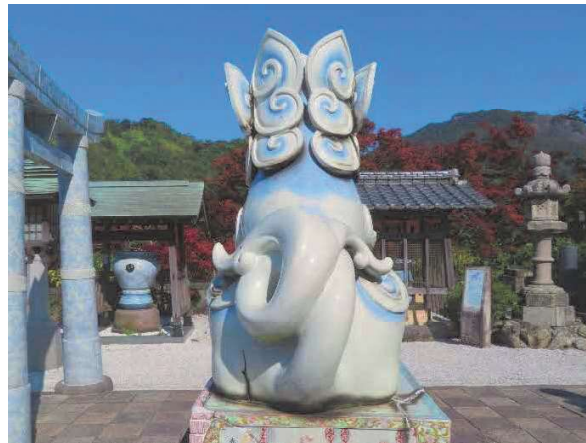
昭和 40 年代前半撮影

写真提供：十四代今泉今右衛門様

修復前「磁器製狛犬本体」の現況

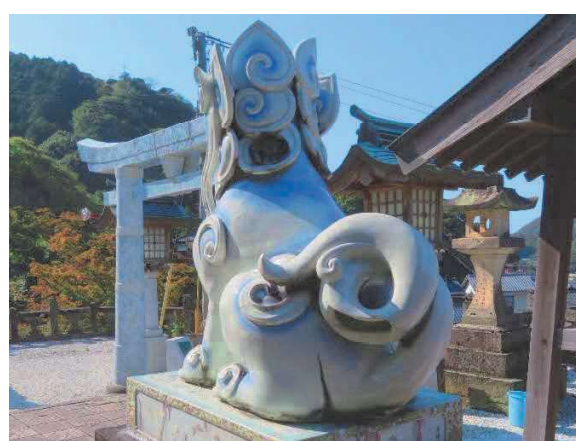
●正面右側「阿形狛犬」の現況

◆撮影：令和4年(2022)11月8日



●正面左側「吽形狛犬」の現況

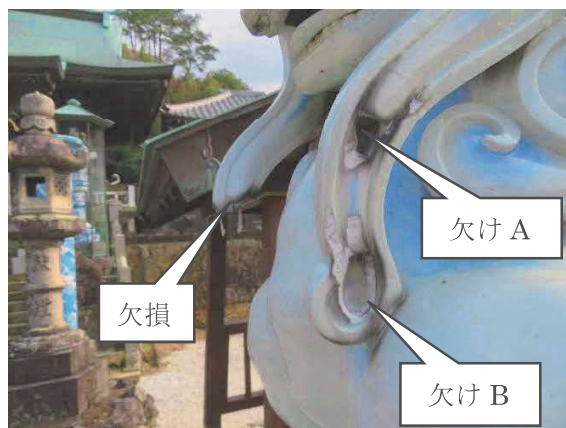
◆撮影：令和4年11月8日



●磁器製狛犬の主たる欠損部

◆正面右側「阿形狛犬」

◇左角髪部の欠損と右角髪部の欠け



欠損部拡大



欠け部拡大



◆正面左側「吽形狛犬」

◇首後の最下段飾り剥がれと尾部欠損



剥がれ拡大



欠損部拡大



修復前「磁器製狛犬台座」の現況

●正面右側「阿形狛犬台座」の現況

◆撮影：平成 29 年(2017) 3 月 9 日



正 面



正面から上面



正 面



正面から右側面



後 面



正面から左側面

●正面右側「阿形狛犬台座角部」

◆撮影：令和4年(2022)12月28日



角部A



角部B



角部C



角部D



正面前足側 →

●正面左側「呷形狛犬台座」の現況

◆撮影：平成 29 年(2017) 3 月 9 日



正面から左側面



正 面



右側面



左側面



後 面



後面「赤繪町區」拡大

●正面左側「咩形狛犬台座角部」

◆撮影：令和4年(2022)12月28日



角部A



角部B



角部C



角部D



← 正面前足側

狛犬台座解体作業

● 阿・吽形狛犬台座解体

◆ 阿形台座解体状況

◇ 解体月日 : 令和 5 年(2023) 5 月 10 日



上 面



正 面



右側面から後方



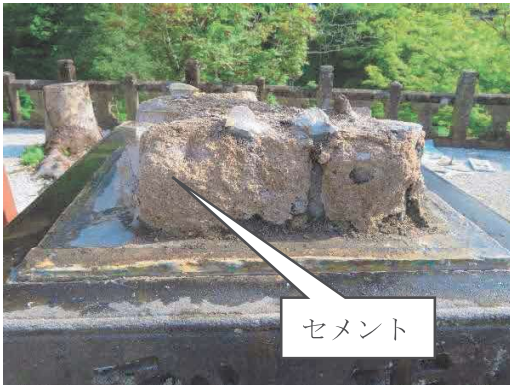
後 方



左側面

- ・ 設置時は支柱の間には土を充填していたと思われるが、正面及び右側板の破損をセメントで補修した際に一部土を除去し、セメントに置き換えたと見られる。
- ・ 支柱の一部は天板及び底板と密着している箇所があった。支柱は焼成時の補強材であり、また狛犬の荷重を支える役割を担っていた。

◇台座底板上のセメントと支柱



正 面



後方から左側面



正面から左側面



正面から右側面



上 面



台座取外し後の設置台



← 狛犬の左右前足直下にあった →
鉄棒は既に切断されていた。
(113 mm L×32 mm φ×2本)



◆吽形台座解体状況

◇解体月日：令和5年(2023)5月10日



1. 後方右から解体

→



2. 陶板を外す



3. 吽形台座内部は土のみ充填

→



4. 後方から左側面



左側面から正面



右側面から後方



前足直下の鉄棒

*吽形台座内からも狛犬左右前足直下から切断されている鉄棒がでてきた。狛犬が動かないように鉄棒を入れたものの何等かの理由で設置後に切断されたものと見られる。(113 mm L×32 mm φ×2本)

◇吽形台座底板を設置台から取り外す手順（阿形台座も同じ方法で取り外した）



1. 準備完了



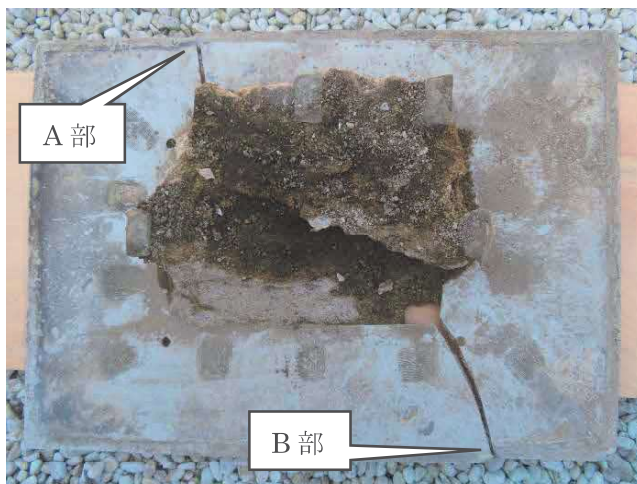
2. 台座と設置台の隙間に割り箸挿入



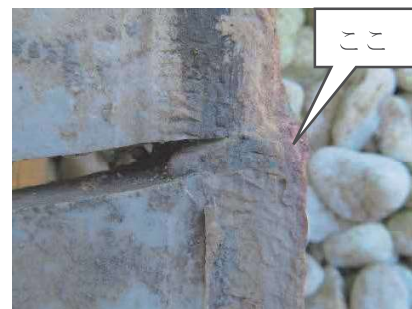
3. 受け板を挿入



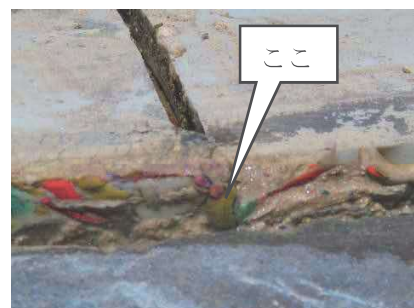
4. 受け板で底板を取り外す



“吽形台座” 取外し後の現況



A 部拡大



A の側面絵付け部にヒビはない

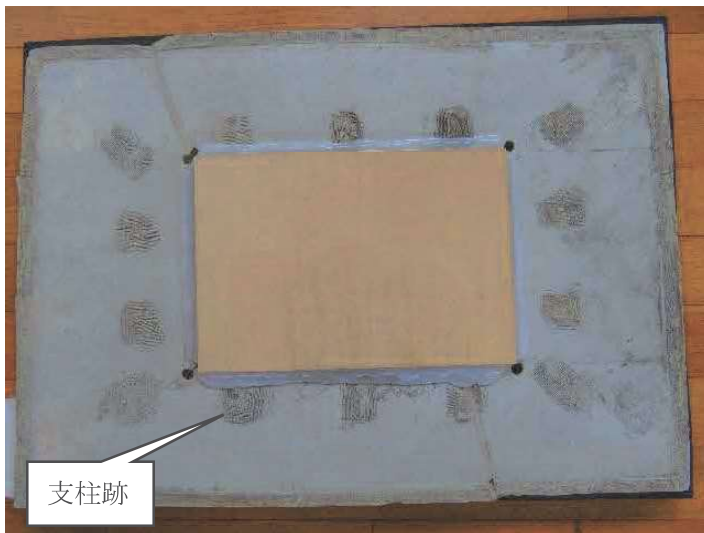
*A・B 部は焼成時の割れと認識される。理由は、A 部はズレてくっついており、釉薬による接着と釉薬上の絵付けが確認できた。このことから、吽形台座は本焼成後には既にヒビ割れた状態であったことが知れる。

狛犬台座解体部材の参考写真

● 狛犬台座解体部材

◆ “卍形” 狛犬台座部材から

◇ 台座底板



台座内側（支柱位置）



台座外側（設置台との接地面）

* 中心の板部は四角に切り抜かれ
支柱を差し入れたと思われる。

◇ 台座正面から右側面の角部



正面右側角部



台座内側の支柱接着部



正面側

* 3 枚の写真は同じ部材

◇台座右側面から後面の角部



正面右側後面角部



台座内部の支柱接着部



後面左側

* 3枚の写真は同じ部材

◇その他主要な関連部材



阿・吽形狛犬「台座内部」の復原と補強

●台座内部の復原と補強方法

狛犬を設置する台座は当時の支柱だけで支えるには難がある。支柱を元の位置に復原した後、支柱間に新たな補強用 SUS 板を配置して台座自体の強度を確保した。

◆SUS 板による補強方法（阿・吽形台座に共通）



正面



SUS 板補強

右側面



SUS 板補強

正面から右側面へ



既存の支柱

正面から左側面へ



支柱は元の場所
に接着した

狛犬本体の荷重を受ける陶板
と SUS 板との緩衝材として
ウレタン樹脂を採用

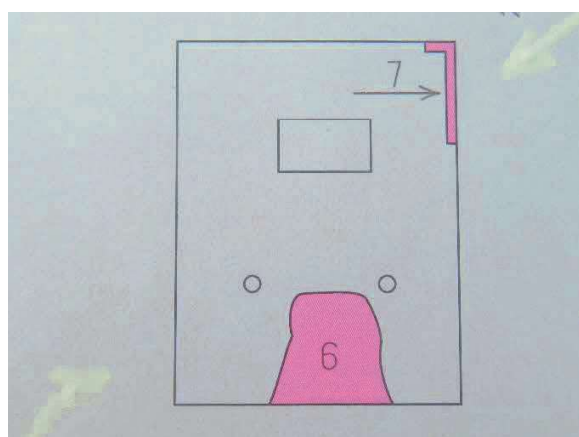
台座内部の SUS 板補強方法

阿形狛犬台座「陶板」を復原する

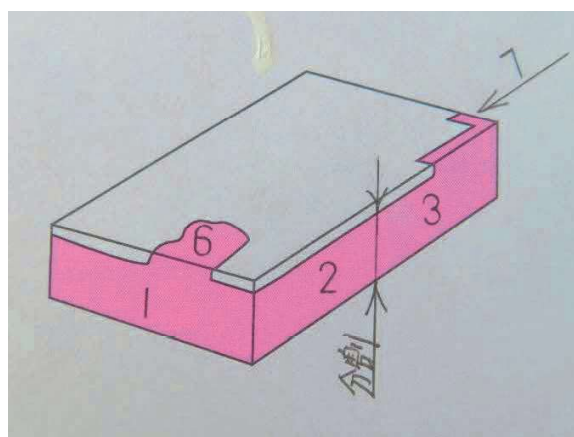
●阿形狛犬台座の「陶板」復原方法

◆決定日：令和 5 年(2023) 2 月 27 日

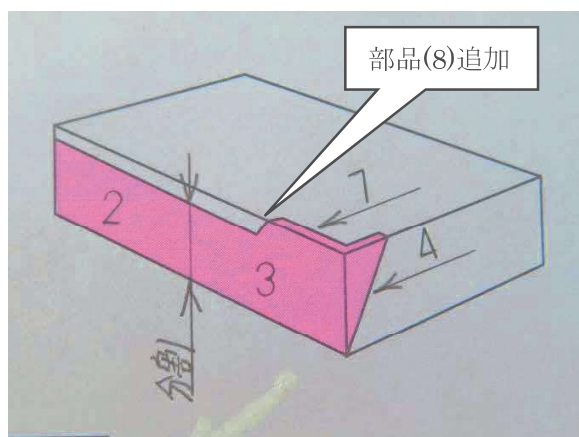
(株)スタジオ三十三より、阿形狛犬台座の欠損箇所について樹脂による復原では経年劣化により変色を生じるとの指摘があり、陶板による復原を決定した。復原する陶板は、当初の案は下図の通り 7 分割して組み上げる方法とした。残存の陶板はそのまま使用し、新たに作る陶板と一体化させる方法を採用した。



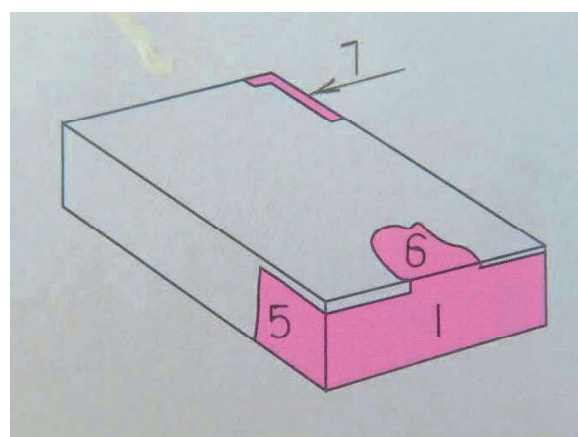
上 面



正面から右側面へ



右側面から裏面へ



左側面から正面へ

◇陶板製作は“色鍋島今右衛門技術保存会”が担当した。白磁の陶板は、スタジオ三十三にて既存の陶板にセットできるように切削加工にて調整を行った。その結果、部品(7)をセットした際に上面の陶板と隙間が生じたため、新たに部品(8)を追加した(26 頁を参照)。

◆形状確認用“台座陶板”試作

◇令和5年(2023)4月11日

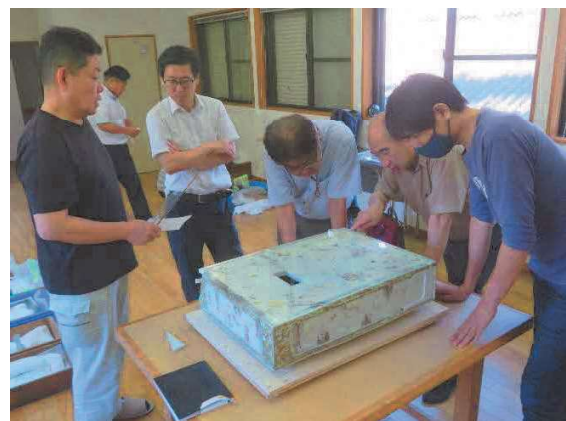
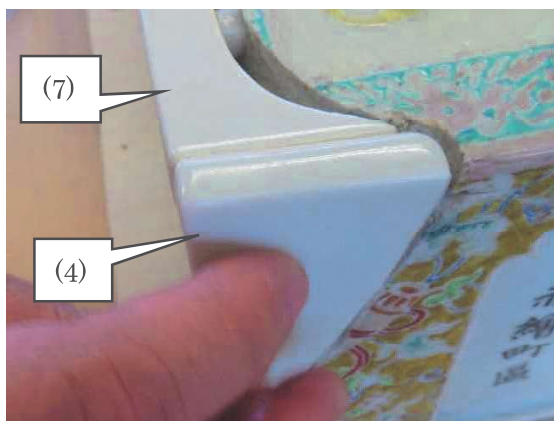
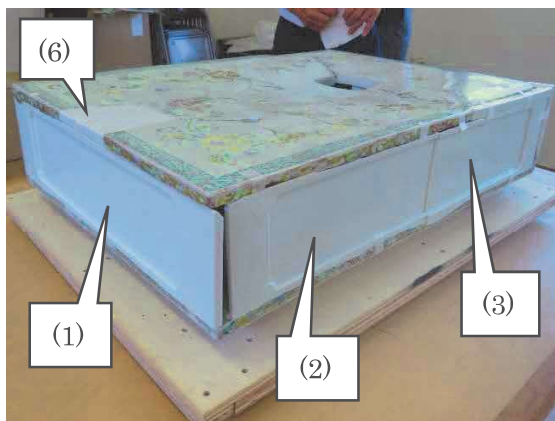
台座解体前の実寸測定から試作品を製作し、陶板の収縮を確認した。



◆2回目“台座陶板”形状確認

◇令和5年(2023)8月4日

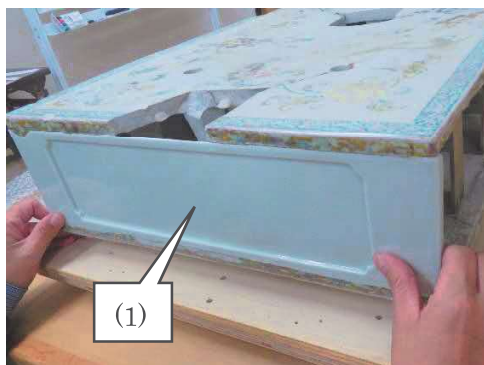
試作陶板を参考にして全パーツ7部品製作したが、組み合わせ部の隙間が大きく再製作することとなった。



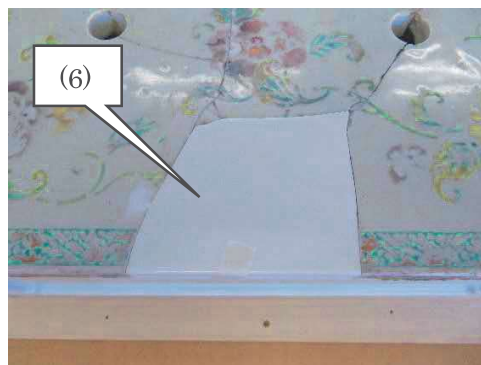
全員で協議し再製作となった

◆ 3回目 “台座陶板” 形状確認

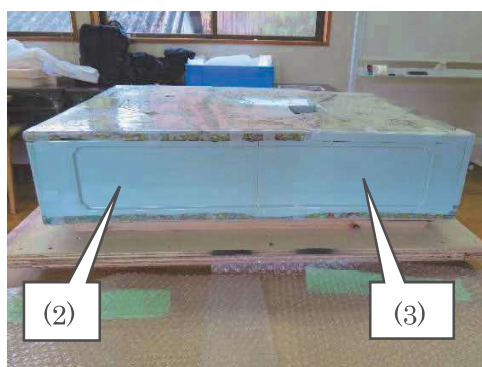
◇令和5年(2023)12月5日



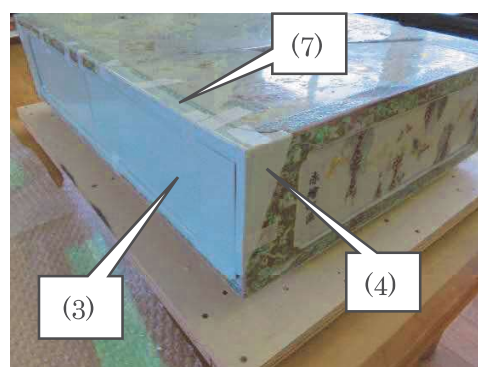
正面部品(1)



上面部品(6)



右側面部品(2)・(3)



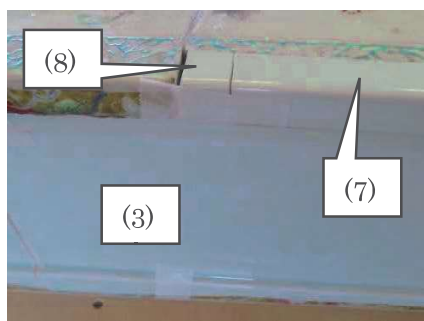
右側面から裏面へ部品(7)・(4)



裏面部品(4)



左側面部品(5)



右側面部品(3)・(7)・(8)

←部品(7)をセットした際に若干の隙間が生じたため、新たに部品(8)を追加加工してその隙間を補填した。

* 陶板は令和5年(2023)8月4日に一度完成したが、一部の部品間で隙間が大きく再製作となり、12月5日の再確認で「阿形狛犬台座陶板」の製作を完了した。

阿形台座復原陶板絵付け用に「新たな上絵具」開発

● 呷形台座文様より明治期上絵具の分析と開発

阿形台座の復原にあたり十四代今泉今右衛門氏は、陶板復原とともに呷形台座を参考にして、阿形台座欠損部の文様も復原された。文様復原では佐賀県窯業技術センターに依頼して、呷形台座文様から「上絵具」の採取と分析を行った。その分析結果を参考にして、上絵具製造の辻昇楽様（国選定保存技術保持者）のご協力を得て、新たに明治期「上絵具」の発色が再現された。

◆ 呷形台座より「上絵具」の採取と分析

採取日： 令和 5 年(2023) 7 月 3 日

採取部： 「呷形狛犬台座」の狛犬腹部直下より採取した。

採取数： 3 点

◇ 採取場所



呷形台座 3 ヶ所から採取



No. 1 採取部



No. 2 採取部



No. 3 採取部

◆現在の「上絵具」による発色と線径の確認

◇令和5年(2023)5月27日現在



◆開発された「上絵具」による発色確認

◇令和5年(2023)9月14日現在



◇令和5年(2023)12月5日現在

文様下地「黒黄び」の発色が明るすぎて違和感があるとのことで引き続き調整する。



明治20年(1887)の「黒黄び」と対比

◆復原陶板 8 部材への上絵付け完成

◇令和 6 年(2024) 3 月 18 日



正面部材(1)



上面部材(6)



右側面左部材(2)



右側面右部材(3)



後面部材(4)



左側面部材(5)



上面部材(7)



上面追加部材(8)

◇各部材の上絵付けの仕上がり状態



後面部材(4)の仕上がり



部材(1)蝶の乱舞



蝶の乱舞拡大



←部材(1)の
左上部拡大



部材(5)の→
部分拡大

←部材(1)の
右上部拡大



阿・畔形狛犬 “台座据付け”

●阿・畔形狛犬台座を据付ける

◆台座と設置台の水平を確認する

◇据付け日： 令和 6 年(2024) 4 月 18 日



↑ 狛犬設置台にテントを設営 ↑



台座の梱包状態



京都で修復された台座を搬入する



↑ 台座を設置台に仮置きし、水平を確認しながら設置台の突起部を削り調整する ↑

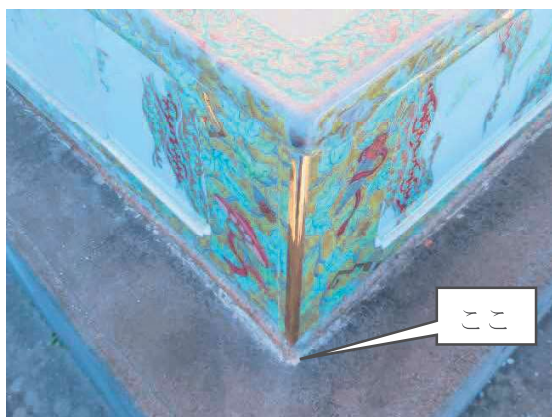




↑ 水平を確認後、凹部にやや粗い砂を充填し、設置台を均一に調整する ↑

◆阿形台座と設置台の接合角部位置合わせ

◇復原陶板と遺存陶板との接合による台座の位置確認



正面左手前の角部



正面右手前の角部



正面右手奥の角部



正面左手奥の角部

* 4ヶ所の角部は、設置台の掘り込み部との位置合わせに問題はなかった。

◆阿吶形台座内部に充填する混合土（漆喰）をつくる

◇混合土は、「真砂土+消石灰+粘土+にがり+水」でつくる。



真砂土



消石灰



粘土



最後に“にがり”を入れ、水を適量加えてよく混練したら完成

◆台座内部へ混合土（漆喰）を充填する

◇支柱や補強材である SUS 板の間にも隙間なく充填し突き固める



(1)台座内に混合土を充填する



(2)隙間なく充填し突き固める

* 前頁よりつづく



(3)最後までしっかり充填する

→



(4)穴あきプラスチック板で蓋をする



(5)蓋を樹脂で封止する

→



(6)混合土（漆喰）の充填完了

◆ 阿・吽形台座を据付ける

◇ 数 10kg の重さとなった台座は板に載せて設置台に据付ける



板を引き抜いて据付け完了



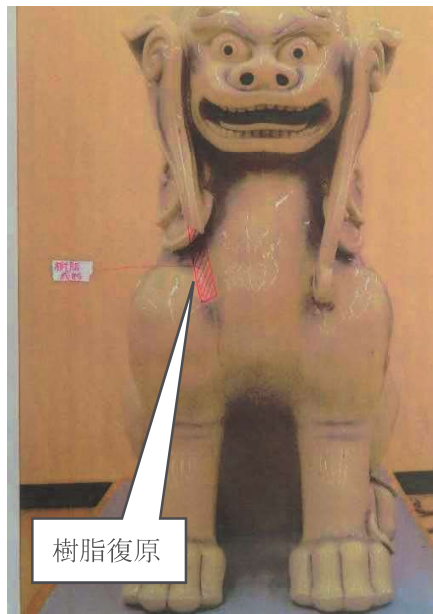
阿形台座据付け完了

* 台座据付けまでの全工程は、阿・吽形とも同じ作業手順で実施した。

阿・吽形「狛犬本体」の修復と復原箇所

● 狛犬本体の主要な修復と復原箇所

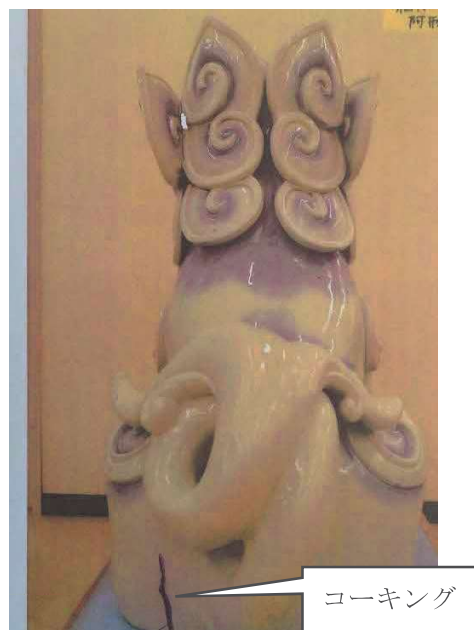
◆ “阿形” 狛犬の修復と復原



角髪折損部復原



飾り最下部の欠け修復

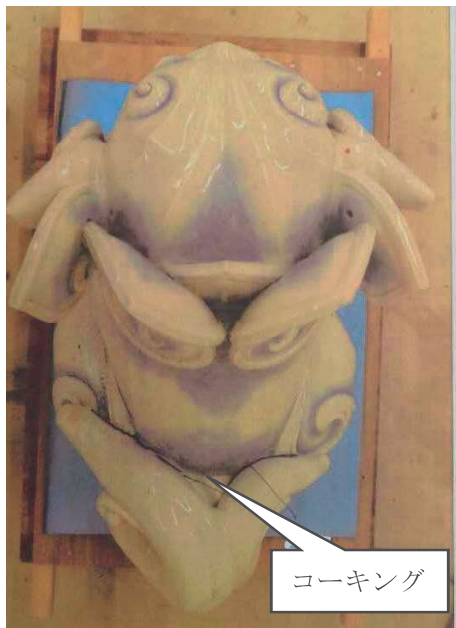


臀部のヒビに樹脂充填

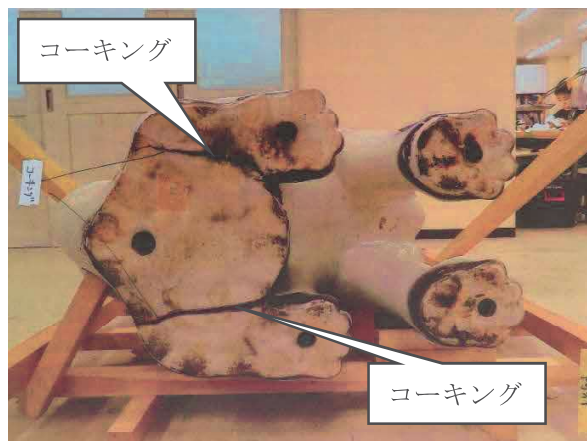


角髪の成形と尻尾のヒビに樹脂充填

◇ “阿形” 狛犬つづき



尻尾と胴体間のヒビに樹脂充填



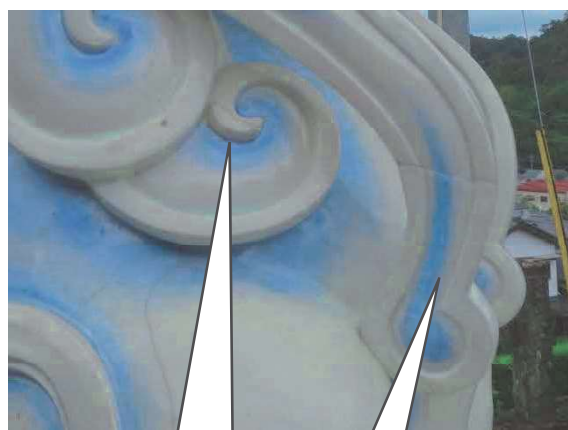
狛犬底面のヒビへ樹脂充填

*底面に製作者名はなかった。

* 「修復報告書8」 で使用した狛犬修復前の画像は（株）スタジオ三十三提供による

◆ “阿形” 狛犬修復と復原例

◇ 角髪及び飾りの樹脂による成形と復原



樹脂による成形

樹脂による復原

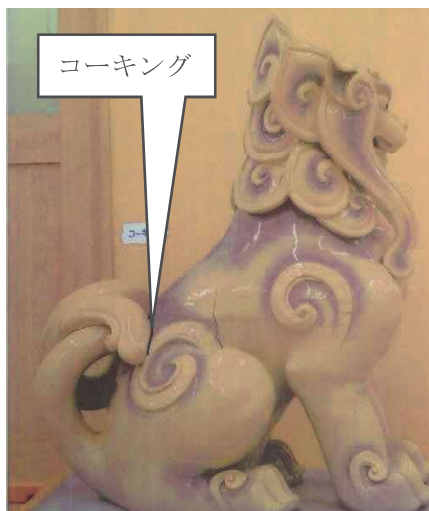


樹脂による成形

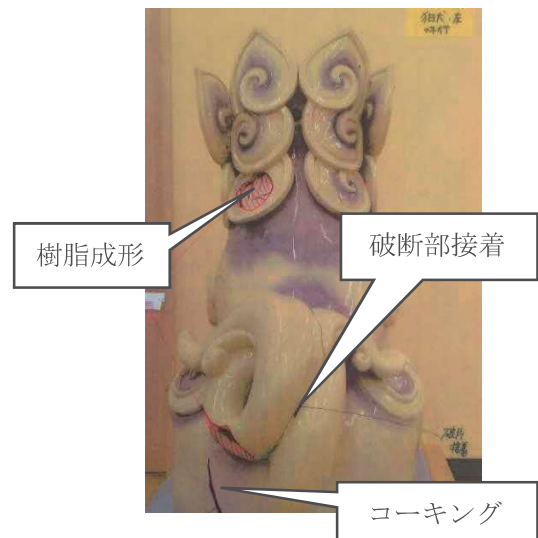
◆ “吽形” 狛犬の修復と復原



↑ 鼻・両前足の成形と樹脂充填 ↑



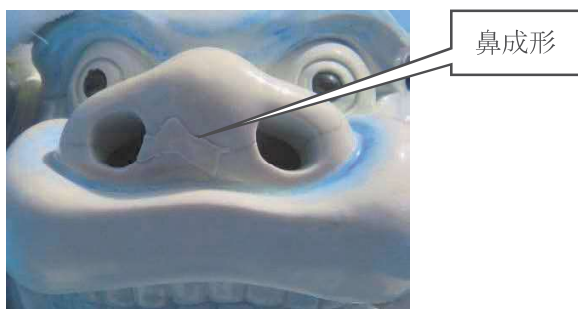
尻尾先端のヒビに樹脂充填



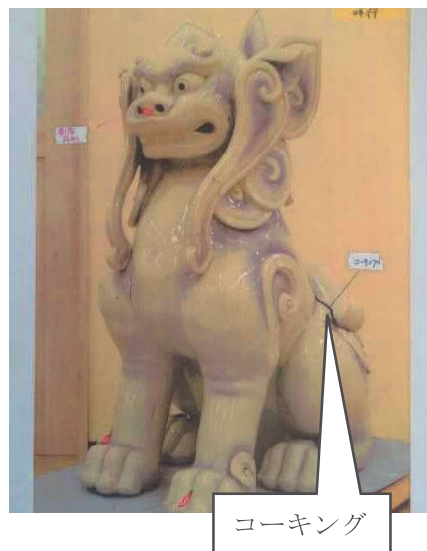
尻尾の破断部は接着

◆ “吽形” 狛犬樹脂成形による修復例

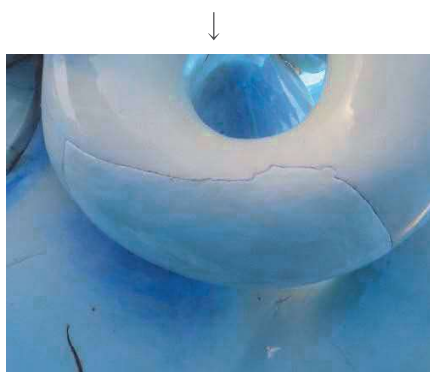
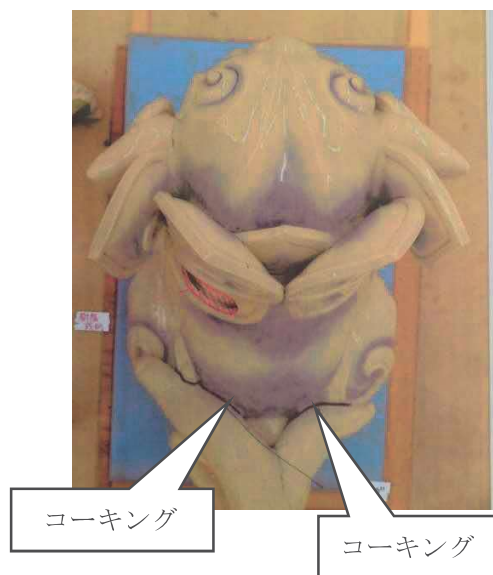
◇ 鼻及び飾りの樹脂による成形



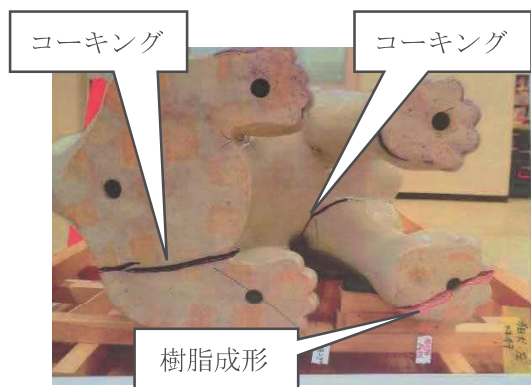
◇ “咩形” 狛犬つづき



↑ 飾り・足の成形と樹脂充填 ↑



尻尾の樹脂復原



狛犬底面の成形、樹脂充填
*底面に製作者名はなかった。

阿・吽形 “狛犬本体据付け”

●阿・吽形狛犬本体の据付け

◆狛犬と台座及び設置台の隙間処理

◇据付け日： 令和 6 年(2024) 4 月 19 日



京都で修復された狛犬を搬入する



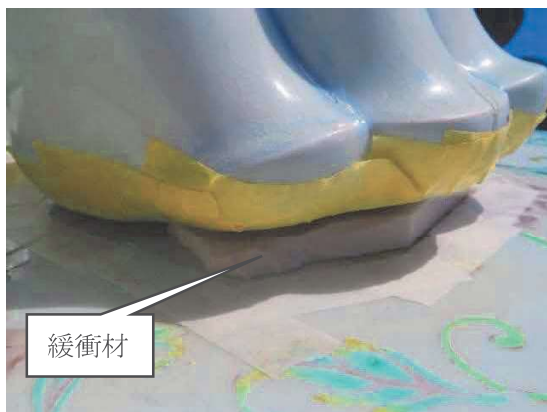
狛犬を台座へ据付ける



足元の隙間



臀部の隙間



隙間へシリコンを挿み込む

→



周囲をシールする

◇台座と設置台間もシール処理する



阿形台座と設置台間のシール前処理



咩形台座と設置台間のシール前処理



咩形台座シール処理中



咩形台座シール処理後



↑ 阿・咩形狛犬・台座・設置台のシール処理完了 ↑



← 狛犬臀部からの水抜き口

台座と設置台間の水抜き口 →

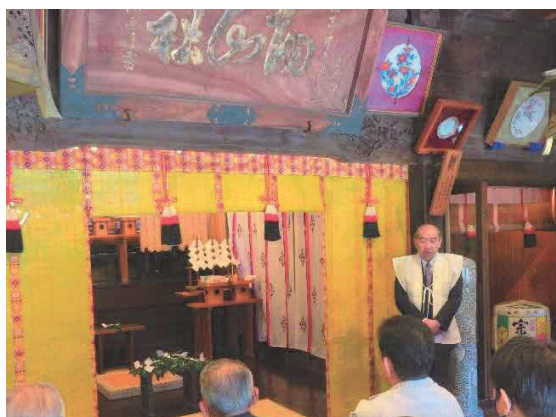


陶山神社磁器製狛犬と台座修復記念式典

●磁器製狛犬と台座修復記念式典

◆奉告祭： 令和 6 年(2024) 4 月 25 日

◇神事



↑ 十四代今泉今右衛門さん御挨拶 ↑

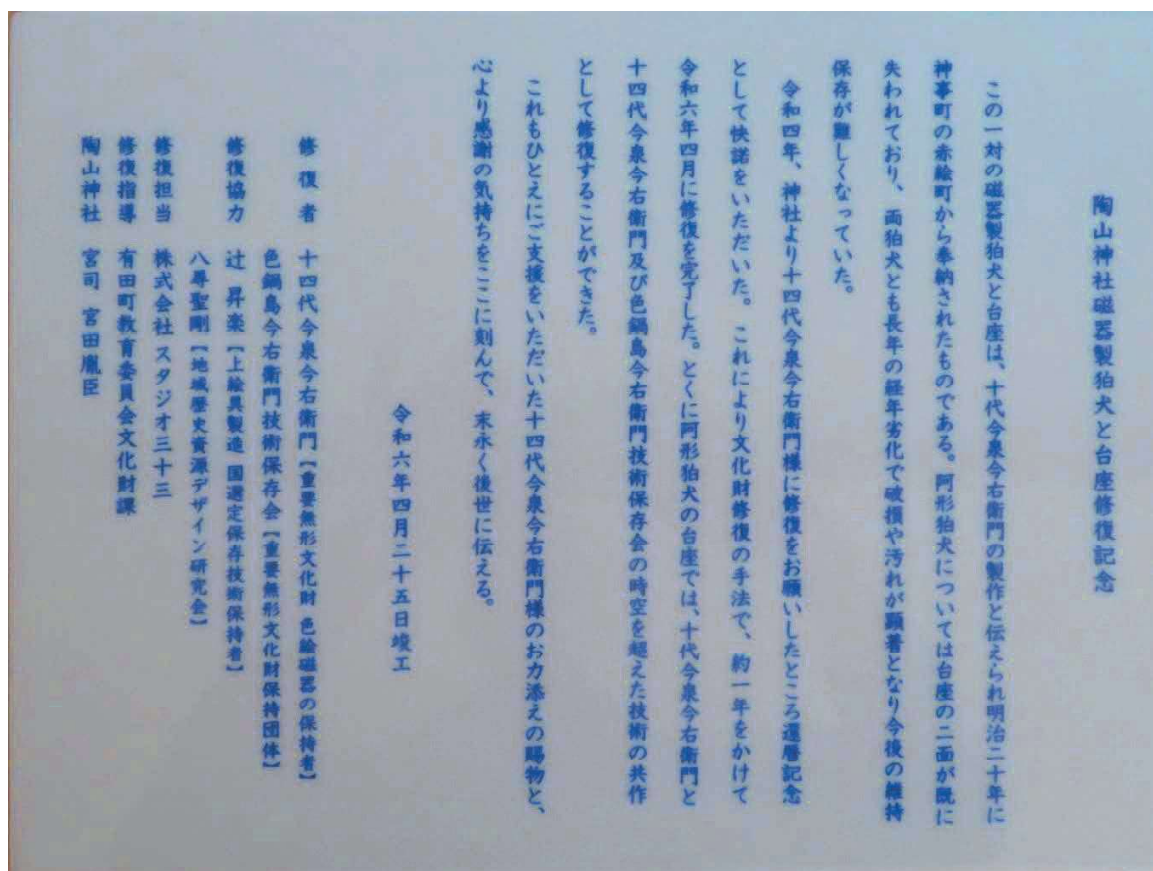


↑ 修復された狛犬と台座をお披露目 ↑

●修復記念陶板設置

◆設置日： 令和6年(2024)7月30日

◇記念陶板は“阿形狛犬”横に設置



【参考資料 1】

● 狒犬・台座採寸

- ・採寸は、設置台上に台座と狒犬を設置した状態で行った。

◆ 狒犬本体

- ・体高は、基準となる台座の変形や割れなどがあるため参考値とする。

〈単位：mm〉

	幅（臀部）	長さ（爪先～尻尾）	体高（飾り先端～台座まで）
阿形狒犬	430	710	829
吽形狒犬	430	690	825
平均値	430	700	827

◆ 台座

- ・測定値は、台座全体に変形や割れがある状態で修復しているため参考値とする。
- ・高さの測定箇所は、(1)前面左角、(2)前面右角、(3)右奥、(4)左奥とする。
- ・前/後面とは、前足側を前面とする。左右は前足側からみた場合を指す。

〈単位：mm〉

	幅(前/後面)	長さ(左/右)	高さ（１）	高さ（２）	高さ（３）	高さ（４）
阿形狒犬	480 / 475	670 / 670	145	142	144	140
吽形狒犬	480 / 480	675 / 675	140	144	140	143

◇ 狒犬・台座の正確な採寸が必要な場合は、三次元測定で行う必要がある。

【参考資料2】

● 昭和60年代(1985 - 89)に米国で撮影されていた磁器製狛犬

本報告書の最終校正を行っていた昨年12月30日、有限会社東西古今代表取締役蒲地孝典氏より、米国訪問中に撮影した磁器製狛犬の写真があるとの一報をいただいた。



1985~89年に米国で撮影



“阿形狛犬” 2024年4月25日撮影

蒲地氏によればこの磁器製狛犬の写真は、昭和60年代(1985-89)に有田焼の販売で訪米中にロサンゼルスのお客様宅で偶然目にする事ができたとのこと。顧客は京都の骨董屋にて購入したとの由。しかし、その後所有者は亡くなられ、磁器製狛犬の行方は不明とされている。写真は鮮明さを欠くが、陶山神社の磁器製狛犬の“阿形”と飾り位置や爪先、右肩の陽刻文様とその位置が酷似しており、同型で制作されたと思われる。

中島浩氣著の『肥前陶磁史考』(1936)によれば、今右衛門窯では既に明治31年(1898)には陶窯が築窯されていることが記されている。さらに、昭和2年(1927)に十代今泉今右衛門(藤太)が没した際の事績紹介では、「自邸内に築窯して、素地を製造することと成った。内地向は勿論曾て動工社を組織して外国貿易を盛んにせしことあり。」と記されており、この動工社を通じて磁器製狛犬が販売されたか、いずれかの神社へ奉納されたと推測される。

これらのことから、明治20年(1887)の奉納にあたり制作された狛犬は一对ではなく複数制作されたと思われる。その後、奉納もしくは販売されたあと何らかの事情により、骨董市場に出回った可能性があり、“吽形狛犬”を含めて今後の調査が必要となる。

先述した『有田皿山遠景』に記されている池田忠一氏の「……今泉家にはつい最近まで型が保存されていたそうだ。」という言葉が現実味を帯びてくることになるが、現段階では今右衛門窯では型は確認されていない。

【編集後記】

私は、昭和 59 年(1984)に福岡からここ有田町へ移住しました。退職後の平成 25 年(2013)に「地域歴史資源デザイン研究会」を設立し、昨年までの 11 年間福岡県の九州歴史資料館でボランティア活動しながら文化財との関わりかたを学ばせていただきました。同じく、平成 25 年(2013)、有田町歴史民俗資料館の「ありたれきみんな応援団」にも所属して、有田や有田焼の歴史について学んでいます。

平成 31 年(2019)、これまで二つの資料館で学んできた文化財との関わりかたを生かし、移住当初から気になっていた陶山神社の磁器製鳥居・狛犬の経年劣化による傷みについて、何としてもこれを修復して先人の遺産を後世に引き継がなければとの思いに至りました。

令和 2 年(2020)に竣工いたしました「磁器製鳥居修復事業」では、磁器質の修復は京都の株式会社スタジオ三十三様に一任し、修復費用につきましては、株式会社香蘭社社長深川祐次様のご支援により有田商工会議所様と有田町総区長会様の全面的なご協力を頂いたことで、有田町民と町内企業様のご芳志を賜ることができました。

さらに今回の磁器製狛犬修復につきましては、令和 4 年(2022)宮田宮司様より十四代今泉今右衛門様へ磁器製狛犬修復のお願いがなされ、ご承諾をいただくことができました。

特に阿形狛犬の台座修復につきまして、明治期の絵付け用絵具開発では、十四代今泉今右衛門様のご尽力により、上絵具製造の辻昇楽様のご協力をいただくことができ、令和 6 年(2024)4 月の竣工に至りました。

今回、先人の遺産である磁器製狛犬をどのような手順と手法で修復・復原したのか後世へ引き継ぐために本報告書を作成いたしました。

(地域歴史資源デザイン研究会 / 八尋聖剛)

＜謝辞＞

今回の磁器製狛犬修復事業にあたり、文化財に準じる修復に技術的助言をいただきました有田町歴史民俗資料館館長の村上伸之様、そして修復事業に真摯に携わっていただきました株式会社スタジオ三十三 代表取締役 撫養健至様には厚く御礼申し上げます。

尚、本報告書で掲載致しました昭和時代の阿形狛犬写真は十四代今泉今右衛門様より、米国内の磁器製狛犬写真は蒲地孝典様よりご提供いただき、狛犬本体の修復と復原箇所の写真は株式会社スタジオ三十三様にご協力いただきました。末筆ながら記して御礼申し上げます。

陶山神社「磁器製狛犬修復事業」報告書

編 集 地域歴史資源デザイン研究会 八尋聖剛
発 行 地域歴史資源デザイン研究会
発行日 2024 年 09 月 30 日
改 訂 2025 年 01 月 31 日